

# 第1節 ティーム・ティーチング(TT)による指導について

涌井恵 花輪敏男 篁倫子 森美加 干川隆

## I. TTによる指導と配慮児童に関する実態調査

### 1. 目的

文部省(現文部科学省)は第6次義務教育諸学校教職員配置改善計画(平成5～12年度)において「個に応じた多様な教育」の展開を意図し、TTのための教職員の配置を行ってきた。これに対し、平成11(1999)年7月に発表された文部省(現文部科学省)の「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」の報告書では、ティーム・ティーチング(以下、TT)による指導が学習障害児への支援方法の一つとして提案されている。学習障害児はその特性から通常の一斉授業形態による指導では十分に学習内容を理解することができないことがあるが、個別の指導方法がとられれば、通常学級でも十分に学習できる者が相当数存在する、というのがその理由である。しかし、TTが及ぼす子どもの学力や教員に与える効果について、実証的に検討した研究は非常に限られており(国立教育研究所, 1999)、さらに学習障害児の在籍する学級におけるTTの実践例や効果については現在のところ、ほとんど報告されていない。

したがって、「個に応じた多様な教育を展開することができる教職員配置をするため」に実施されているTTによる指導が、学習障害児に対する指導方略の一つとして、今後どの程度、実行可能性があるのかを検証する必要がある。通常学級の担当教員における学習障害の認知度はあまり高くなく、学習障害児は学級・学校内では配慮が必要な児童として取り上げられることが多いと考えられる。そこで、本調査では、TTによる指導と配慮児童の実態を把握し、学習障害児への支援リソースの一つとしてのTTを検討することを目的とした。

### 2. 方法

#### 1) 調査対象

本研究近隣のY市教育委員会より、TTに関する積極的な取り組みを行っている学校として紹介された小学校5校を対象校とし、①TT担当教師(各学校1名)を対象に面接調査を行い、②学校長を対象にアンケート調査を行った。表1に対象校の概要を示した。

①の実施率と②の回収率は100%であった。

表1 対象校の概要

対象校	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校
児童数	563	688	322	587	548
通常学級数	18	21	12	18	17
特殊学級数	0	0	1*	2**	0
教職員数	34	38	28	39	30

注\*：情緒。注\*\*：知的と情緒

#### 2) 調査期間

2000(平成12)年1月31日～2000(平成12)年2月29日

#### 3) 調査方法

TT担当教師に対する面接調査(以下、TT担当教師面接調査)では、本研究所所属2名が聴取者となり、半構造化された面接を行った。面接は、TT担当教師の勤務校へ訪問して行った。調査項目は、①担当教師自身のことについて、②TT実施の学年とクラスについて、③TTの効果について、④TTを実施していく上での困難・問題について、⑤配慮を必要とする児童について、⑥配慮を必要とする児童へのTTの対応について、⑦学習障害について、⑧支援体制について、⑨その他の9項目にわたっていた。

学校長対象のアンケート調査は、TT担当教師面接調査のために学校訪問した際に、学校長へアンケート調査を依頼し、郵送にて回収を行った。調査項目は、TT担当教師面接調査と共通であった。

### 3. 結果と考察

表2に、面接を実施したTT担当教員のプロフィールとTT実施内容を示した。どの学校も教職経験約15年以上のベテラン教師が配置されていた。特殊教育の経験や特殊教育免許のある者はいなかった。C小学校では算数のTTに大学院で算数教育を学んだ教員を充てていた。TTを実施している教科として、算数をあげた学校が3校と最も多かった。実施学年は各校様々であった。TT実施教科・学年の選定の理由として一番多くあげられたのは、「つまづきを示す児童が多いから」という理由であった。1997年に行われた国立教育研究所のTTの実施状況に関する調査結果では、「個人差が顕著であるから」という理由が最も多く挙

がっており、本調査でも同様の結果が得られたと言える。また、教職経験の長い教員を配置しているという点も、国立研究所の調査結果(1997)と同様であった。なお、D小学校では、音楽の授業は交流・TT授業となっており、特殊学級在籍児童3名が参加しているということであった。授業の形態については、1学級主補方式はどの学校でも取り入れられていた。学年合同TTや、ボランティアを活用したTT、課題別・コース別グループ学習など多様なTTを取り入れていた学校は3校であった。

次に、TTの効果や困難・問題点について述べる。TT担当者も学校長も、5校全てが児童、教師にとっ

てTTは有効であると述べ、困難や問題はほとんどないという評価であった。学校長は学校運営上も有効であると答えていた。表3にTTの効果(5校中4校以上の回答があったもの)、表4にTTを実施していく上での困難、問題(1校でも回答があったもの)について、TT担当者と学校長の回答結果をまとめて示した。また、資料1にTT担当者面接調査の結果を、資料2に学校長対象のアンケート調査結果を示した。

児童にとっての効果として、TT担当者と学校長から共通して回答があったのは、「学習への理解の深まり」、「習熟度に応じた学び方ができた」、「学級担任以外の教師との人間関係が広がった」といった効果が報

表2 面接を実施したTT担当教員のプロフィールとTT実施内容

	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校
<b>I. 担当者のプロフィール</b>					
TT担当者教職経験年数	22	17	20	28	16
現在の学校での着任年数	8	8	2	8	7
TT担当年数	3	2	1	4	1
特殊教育の経験	無	無	無	無	無
特殊教育免許の取得	無	無	無	無	無
その他			大学院で算数教育を学んだ。		
<b>II. TT実施対象と内容</b>					
TT担当者数	3人	3人	1人	2人	1人
実施教科	生活科・社会	算数	算数	理科・音楽、理科	算数、社会
教科	個人差が顕著になる教科であるから	○	○		○
選定理由	つまづきを示す児童が多いから	○	○	○	○
	学校の研究テーマとの関連から	○			
	その他(子どもの興味関心をいかす)				○
実施学年	全学年	1年生, 2年生, 3年生	5・6年生	3年生, 6年生	3年生, 4年生
当該学年	個人差が顕著になる学年であるから		○		○
選定理由	つまづきを示す児童が多いから	○(3年生)	○	○	
	学校の研究テーマとの関連から	○			
	その他	1・2年生は基礎をしっかりと理解させるため。			地域・体験学習充実のため
担当学級数	18	3, 4, 3	4	3, 3	3
担当時間数	平均24(単元のスケジュールに合わせるので週によって異なる)	6, 4, 15	20	15, 9	15
授業形態	・タイプⅠ:1学級主補方式。 ・タイプⅡ:学年合同TT。 ・ボランティアも活用。	・主に1学級主補方式(1・2年生はT1:担任、T2:TT担当。3年生はT1:TT担当, T2:担任)。	・主に1学級主補方式(T1:TT担当, T2:担任)。 ・2クラス合同で3名の教師によるコース別TTを行うこともある。	・多様な形態(1学級主補方式、課題別グループ学習、1学級が別々の教室でグループに分かれての学習など)	・主に1学級主補方式(T1:TT担当, T2:担任)。
TTを導入して	3年目	2年目	1年目	3年目以上	3年目以上
その他特記事項		TT導入に合わせて、学年の児童を互いに見合おうということを申し合わせた。		音楽の授業は交流授業で特学在籍児童3名が参加している。	

告された。加えて、TT担当者は、「学習への興味・関心・意欲の増加」、「学習が遅れている児童への効果」を指摘し、また、「わからないときにすぐ質問できる」という利点があることが挙げられた。

一方、教員にとっての効果としては、「児童の学習上のつまづき、課題が理解できる」、「余裕をもって指導にあたる」ということがTT担当者と学校長から共に挙げられた。TT担当者は、児童のつまづきを「その場ですぐに」判断できるという利点を挙げていた。その他、TT担当者からは、「学習指導内容や教材の理解が深まった」、「お互いの専門性や特性を發揮できた」ということが挙げられた。後者に関しては、TT実施の経過の中で教師自身の雰囲気が変わったという報告もあった。また、TT担当者からは、全ての学校において、教師の人間関係の深まりと協力体制ができたことが挙げられた。児童に関する問題や話題の共有ができ、児童に対する共通理解ができるようである。また、特に若い教員にとっての研修として有効であることが3校のTT担当者から挙げられた。

TT実施の困難や問題（表4）として、TT担当者や学校長から「事前の打ち合わせが不十分で授業進度が遅れる」「授業観や方針等の違いに戸惑う」、TT担当者から「管理職・同僚からのプレッシャー」、校長か

ら「人間関係の煩わしさ」が挙げられたが、どれも1・2校のみからの回答であった。しかしながら、TT担当者の面接では、他の教員に遠慮している印象を受けた。TT担当者は困難や問題はないと否定しつつも、教員の組み合わせで上下関係が同じだと難しい、TT実施前には誰と組むのか不安であったり緊張したといった事柄や、TTというと価値観の違いや人間関係を嫌がる人もいると聞いたという本音も聞くことができた。TTが上手く軌道に乗れば、職員間の協力関係やコミュニケーションが促進されるが、その前段階には、教師に大きな心の壁があることが伺える。

配慮を必要としている児童については、学校長よりもTT担当者の方が、配慮の必要な児童としてより多くの人数を挙げた。このような教師と管理職間の認識の差があると、配慮を要する児童や学習障害のある児童に対する校内の支援体制づくりはなかなか難しいのではないかと考えられる。ところで、学校によっては特殊学級が適当との就学判定を受けている者も在籍していた。このような実情を考えると、学習障害のある児童だけでなく、これらの児童にも配慮したTTの指導方法の開発が今後必要となってくるのではないかと考えられる。

学習障害については、この用語を5校全てが知って

表3 TTの効果

質問項目		回答者	
		学校長	TT担当教員
児童にとって	①クラス全体の学習への理解が深まった。	○	○
	②クラス全体の学習への興味・関心・意欲が増した。		○
	③児童の習熟の程度に応じた学び方を習得することができた。	○	○
	④学習が遅れている児童にとって特に効果があった。		○
	⑤学習が進んでいる児童にとって特に効果があった。		
	⑥体験的な学習や問題解決的な学習が充実するようになった。	○	
	⑦仲間と学び合うことにより互いの交流が深まった。		
	⑧学級担任以外の教師とも授業で接することにより教師との人間関係が広がった。	○	○
	⑨わからないときにすぐ質問できる		○
教師にとって	①児童の学習上のつまづき、課題が理解された。	○	○
	②学習指導の内容や教材について理解が深まった。		○
	③余裕をもって指導にあたるようになった。	○	○
	④個を生かすための指導方法につながった。	○	
	⑤教師が互いの専門性や特性を發揮できた。		○
	⑥学級単位の指導から学年単位の指導がなされるようになった。		○
	⑦教師の人間関係が深まり協力体制ができた。		○

注：○印は5校中4校で回答のあったものを示す。

表4 TTを実施していく上での困難、問題

質問項目		回答者	
		学校長	TT担当教員
と児童 てに	①教師の対応が異なることにより戸惑っている。		
	②どちらの先生に質問してよいか戸惑っている。		
	③緊張しているようだ。		
教師に と つ て	①事前の打ち合わせなどが不十分でかえって授業の進度が遅れるようになった	○	○
	②授業に対する考え方や方針等の違いに戸惑いを感じる。	○	○
	③管理職や同僚から指導力を試されているようなプレッシャーを感じる。		○
	④他の教師に合わせねばならず、人間関係のわずらわしさを感じる。	○	
	⑤児童から教師としての比較をされているようでいい気がしない。		
	⑥従来の一斉授業よりも授業による負担や疲労が増す。		

注：○印は1校でも回答のあったものを示す

いると答え、3校のTT担当者がこれまでに学習障害のある児童を受け持ったことがあると答えた。多動や学業面のアンバランスなどが見られる児童を学習障害と見なしていた。学習障害のある児童を担当したくない教師は、具体的な状態像を持っていなかった。全体的に学習障害に対する理解は低かった。

配慮を必要とする児童の中には特殊学級が適当と判定された児童が含まれている学校もあったが、配慮を必要とする児童についても特殊教育からの支援等を期待している教師はいなかった。自校に特殊学級がある学校は2校しかなかったので、特殊教育に対する情報の乏しさからこのような結果が示されたのではないかと推察されるが、対象数が少ないので、今後の検討が必要である。国立特殊教育総合研究所・知的障害教育研究部が行った知的障害特殊学級実態調査(2000)によると、小学校では約9%の特殊学級担任が通常学級担任とTTで指導を行っていたが、今回の対象校のうち、特殊学級のある学校では、特殊学級担任と通常学級担任によるTTの実践は全くなされていなかった。

文部科学省の「特別支援教育の在り方について(中間まとめ)」(2002)では、通常の学級に在籍する特別な教育的支援の必要な児童生徒に対して、少人数指導や個別指導を行うTTの活用の提唱しているほか、特殊学級、通級指導教室の教員等、障害のある児童生徒の教育に関するノウハウを持つ者が学校全体の指導体制の充実のため、コーディネーターとしての役割を果たすことを求めている。今回の調査では、特殊教育からの支援等を期待している教師はいなかったことから、特殊教育の側からの情報を広く伝えるとともに、支援リソースとしての活用をアピールしていく必要があることが示唆される。

TTの支援体制については、ほとんどの学校が満足していた。また、保護者に対しては、PTAでの広報や懇談会、公開授業、TT通信等の配布などによって理解・啓発活動を行っており、共通理解の不足はほとんど無いという回答であった。

また、TT担当教員にTTに対する意見を自由に述べてもらったところ、習熟度別・能力別のTTを実施すると、低学力の子どもに対して他の児童はこの子は「できない子」と思うようになるといった問題や、また、子ども自身のプライドの問題も挙げられた。これに対する対策として、学級を分けるのではなく、複数の学級を解体してグループを構成した方がよいのではという意見がいくつか出された。こうすることによって、差別感を薄めることができると考えているようであった。差別や偏見を生むことなく、お互いの個性や多様性を認め合える学習集団や学級、学校を形成することが望まれる。習熟度別のTT実施の成功のポイントと

して、異学年交流行事、学年単位でのTTによる授業や行事の実施などによって、学校・学級としての連帯感が高まっており、一人一人の違いを認め合う学校・学級経営が行われていること、学習集団編成の根拠を明らかにし、児童生徒が納得していることが指摘されている(並木,2002;小山,2002)。また、どの学習集団で学ぶのかを教師が決めるのではなく、児童に希望を聞くことで、差別感・抵抗感をなくし、学習意欲を高め、学習効果を上げている実践が報告されている(小山,2002)。平成13~17年度までの5年間にわたる「第7次公立義務教育教職員定数改善計画」が開始され、「基礎学力の向上ときめ細かな指導」を目指し、「少人数指導」のための教員加配措置が取られ、学年を解体して行うTTと少人数指導の実践も報告され始めており(小山,2002)、学習障害児への指導方法としてそれらの発展が期待される。

#### 4. まとめ

最後に、まとめとして、次の3点をTTが学習障害児の支援に果たす可能性として挙げる。

第1に、今回調査から、学習が遅れている児童に対してや、児童の学習上のつまずき・課題の理解という点に対するTTの効果が上げられ、学習障害児の学習においても、TTによる支援が効果的である可能性が示唆された。

第2に、TTによって教員がお互いに学び合う効果があることが示されたことから、学習障害児が在籍する学級においてTTを実施した場合、ある教員が持っている学習障害児の指導のノウハウを他の教員へ伝播・伝授することができるという利点があると考えられる。つまり、他の教員の指導方法を観察学習する機会として、TTは機能できるだろう。

第3に、TTの実施によって児童の共通理解が高まったり、教員間の協力体制ができたことが報告された。こうした効果は、もし学習障害児が学級にいた場合、学級担任一人が抱え込まずにすむ支援体制の強化に有用に働くと考えられる。これらの点をふまえて、学習障害児の参加しているTTの事例研究を実証的に検討することが今後の課題であろう。

#### 文献

- 国立教育研究所(1997):チームティーチングによる指導の効果に関する研究(第一次報告書)。
- 国立教育研究所(1999):チームティーチングによる指導の効果に関する研究(第三次報告書)。
- 国立特殊教育総合研究所・知的障害教育研究部(2000):知的障害特殊学級における教育課程および指導方法

資料 1 T T 面接調査の概要

	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校
I. TTの効果について					
1. 児童にとって					
①クラス全体の学習への理解が深まった。	○	○	○	○	○
②クラス全体の学習への興味・関心・意欲が増した。	○	○	○	○	○
③児童の習熟の程度に応じた学び方を習得することができた。	-	○	○	○	○
④学習が遅れている児童にとって特に効果があった。	-	○	○	○	○
⑤学習が遅れている児童にとって特に効果があった。	-	○	○	○	○
⑥体系的学習や問題解決的な学習が促進された。	-	○	○	○	○
⑦仲間と学ぶことにより互いの交流が深まった。	-	○	○	○	○
⑧学級担任以外の教師とも授業で接することにより教師との人間関係が広がった。	○	○	○	○	○
⑨その他	-	○	○	○	○
2. 教師にとって					
①児童の学習上のつまづき、課題が理解された。	○	○	○	○	○
②学習指導の内容や教材について理解が深まった。	○	○	○	○	○
③余裕をもって指導にあたれるようになった。	○	○	○	○	○
④授業をもっと指導するための指導方法につながった。	○	○	○	○	○
⑤児童が互いの専門性や特性を尊重できた。	○	○	○	○	○
⑥学級単位の指導のほかに学年単位の指導がなされるようになった。	○	○	○	○	○
⑦教師の人間関係が深まり協力体制ができた。	○	○	○	○	○
⑧その他	○	○	○	○	○
II. TTを実施していく上での困難、問題について					
1. 教師にとって					
①授業の設計図を用意することが必要。	○	○	○	○	○
②授業に対する考え方や方針等の違いに戸惑いを感じる。	○	○	○	○	○
③管理職や同僚から指導力を試されているようなプレッシャーを感じる。	○	○	○	○	○
④他の教師に合わせねばならず、人間関係のわずらわしさを感じる。	○	○	○	○	○
⑤児童から教師としての比較をされているようない気がしない。	○	○	○	○	○
⑥従来の一斉授業よりも授業による負担や疲労が増す。	○	○	○	○	○
⑦その他	○	○	○	○	○
2. 児童にとって					
①教師の対応が異なることにより戸惑っている。	○	○	○	○	○
②どちらの先生に質問してよいか戸惑っている。	○	○	○	○	○
③緊張しているようだ。	○	○	○	○	○
④その他	○	○	○	○	○
III. 配慮が必要とする児童について					
(1)学習面において	クラスに1~2人	クラスに5~7人(1学期の終わりに5~5人になる)	6年9人, 5年1人	3年7人, 6年2人	6人
(2)情緒・行動面において	クラスに1~2人	1人	6年2人	5	0
(3)その他	0人	不登校1人	0人	0	0

(注:○は肯定、△はどちらでもない、×は否定、-は無回答を示す。)

に実態調査報告書。

小山隆文(2002):心のバリアフリーを目指した協力体制を軸に,現代教育科学,553,36-38.

文部省(1999):学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議報告書「学習障害児に対する指導につい

て(報告)」.

文部科学省(2002):「今後の特別支援教育の在り方について(中間まとめ)」.

並木康成(2002):一人一人の違いを認め合う学級集団づくり,現代教育科学,546,53-55.

資料1 T T面接調査の概要(続き)

意見	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校
その児童にあると予想される問題の確認について (1) 知的障害(全般的な知能の遅れ)	教科によって判断が難しい(例えば算数>社会)。 情緒1名、肢体1名、脳損傷1名	情緒1名	自閉症1名、多動1名、LD(実際は多動児)1名、肢体2名	わかからない(但し2人は特学適正の判定を交けている)	知的?1名
IV. 学習障害について 1. 「学習障害」という用語はご存知ですか? 2. 障害の概念、状態をご存知ですか? 3. これまでに学習障害と思われる児童を受け持ったことはありますか? ①いつ ②どのような状態だったか?	○ x x	○ ○ ○	○ x ○	○ △ x	○ ○
4. 現在の担当のクラス内に学習障害を疑わせる児童はいます ①どのような状態ですか? 5. その児童に対して何か配慮をされていますか?	- - -	新習の児童字はできるが、数字の操作ができずハニツプになる。 x -	2年前に机にのつたり、机を振り回したりする。 x -	- x -	現在 教の概念が蓄積されていない
V. 配慮を必要とする児童へのTTの対応について 1. TTの必要性について ①他の学習スタイルや能力に応じた指導ができるようになった。 ②きめ細かな指導ができるようになった。	- -	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
③児童のニーズに応じた教材を提供することができるようになった。	-	○	○	○	○
④その他	配慮を必要とする児童はあまりいなかった。	-	-	-	-
2. TTの困難と限界について ①TTで気になる児童を支援するには限界を感じる。 ②障害や障害児への対応などの知識が必要である。 ③障害に関する専門家との連携協力が必要である。 ④その他	- - -	x - -	○ - -	- - -	- ○ ○
VI. 支援体制について 1. 特殊学級の有無 ①気になる児童がいたときに特殊学級の教師と相談したことはありますか? 2. TTの支援体制について ①現在のTTの校内支援体制に満足していますか? ②TTの共通理解の不足がある	無 -	無 -	無 -	有 -	無 -
・保護者から他の学年でもTTをして欲しい ・時間数が多い ・先生の勉強不足、意識改革の必要性 ・スタッフの不足 ③その他	○ - - ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	△:普通 △:公開授業の開催、TT便りの発行を行っている。 「算数通達」を発刊しTTの様子を伝えている。 他の先生方が徐々に共感してくれるようになった。	○ ○ ○ ○
VII. その他 1. TTの考え方や受け止め方、その運営・実施、その効果等、TTについて日ごろ考えたり、感じておられることを自由に述べてください。	TTは教育のキーワード、学級の壁、学校の壁を崩していくことが現在の教育現場での問題を解消していく。学級崩壊や教師の心身症の解消となる。教員数が少ない中でも可能な組み合わせの工夫をしてTTをむっつ増やすといい。子どもの興味・関心を高めることができる。教師の先入観を変えるべき。	同じ教材では対応できない児童がいる。学年があがる、子どもにもプライドが出てきて下学年の学習に履れない。分らないまま、授業に参加しているだけになってしまっう。したがって、低学年のうちからめまこまかな対応をしておくべき。	・特殊の子のためのTTが欲しい。 ・教材の工夫、子どもを引きつける工夫が必要。	算数はできない子のためのTTと違ってしまふのでやらない。できる子、できない子全部の子にとって益のある理科のTTを考えている。できない子への支援が全面に出ると、一緒に生かしている他の児童からこの子は生かしていないと思われ、算数で能力別TTを行う場合は、複数学級合同でクラスを併せると良いのではないか。	総合的な学習の時間の導入により、今後算数のTTはなくなってしまう。

資料2 TTアンケート調査（管理職）の概要

(注:○は肯定、×は否定を示す。)

	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校
<b>I. 配慮を必要とする児童について</b>					
1. それぞれの児童の状態と様子一別紙	0	2	9	2	2
2. 学習障害について					
(1)「学習障害」という用語およびその状態をご存知ですか	○	×	○	○	○
(2)現在の担当クラス内に学習障害を疑わせる児童はいますか	×	判断できない	○	判断できない	×
(3)その児童に対してどのような配慮をされていますか			TTの中で1対1で対応、学習内容を変える		
<b>II. TTの成果について伺います</b>					
1. 児童にとっては					
①クラス全体の学習への理解が深まった.	○	○	○	○	○
②クラス全体の学習への興味・関心・意欲が増した.	○	○	○	○	○
③児童の習熟の程度に応じた学び方を習得することができた.	○	○	○	○	○
④学習が遅れている児童にとって特に効果があった.		○	○		○
⑤学習が進んでいる児童にとって特に効果があった.			○		○
⑥体験的な学習や問題解決的な学習が充実するようになった.	○		○	○	○
⑦仲間と学び合うことにより互いの交流が深まった.	○		○	○	
⑧学級担任以外の教師とも授業で接することにより教師との人間関係が広がった.	○	○	○	○	
その他(資料・教具の準備効率のアップ)			○		
2. 教師にとって					
①児童の学習上のつまづき、課題が理解された.	○	○	○	○	○
②学習指導の内容や教材について理解が深まってきた.	○		○	○	
③余裕をもって指導にあたれるようになった.	○		○	○	○
④個を生かすための指導方法につながった.	○	○	○	○	○
⑤教師が互いの専門性や特性を發揮	○	○	○	○	
⑥学級単位の指導から学年単位の指導がなされるようになった.	○		○	○	
⑦教師の人間関係が深まり協力体制ができた.	○	○			
3. 学校運営上(自由記述)					
教師の相互信頼・協力への理解	○				○
学年全体での対応	○				
研究テーマ「開かれた学校を目指した協力指導」に貢献		○			
新しい教育の方向を示す一例として具体的に示すことができた			○		
児童の学習への意欲に積極的にかかわろうとする教師の姿勢が見られた			○		
TTによる教育効果の高まりが感じられる				○	
<b>III. TTを実施していく上での困難、問題についてうかがいます</b>					
1. 教師にとって					
①事前の打ち合わせなどが不十分でかえって授業の進捗が遅れるようになった.	○				
②授業に対する考え方や方針等の違いに戸惑いを感じる.				○	
③管理職や同僚から指導力を試されているようなプレッシャーを感じる.					
④他の教師に合わせねばならず、人間関係のわずらわしさを感じる.				○	
⑤児童から教師としての比較をされているようでいい気がしない.					
⑥従来の一斉授業よりも授業による負担や疲労が増す.					
2. 児童にとって					
①教師の対応が異なることにより戸惑っている.					
②どちらの先生に質問してよいか戸惑っている.					
③緊張しているようだ.					
<b>IV. その他(自由記述)</b>					
	マイナス面なし。子ども一人一人を違う観点から評価。ボランティアTTの導入により校外に開かれた学校へ。	TTのあり方そのものの多様化	時間数・形態について学校がもっと自由に実施できれば	教師の学習なしに一人歩きしてきたのが近年ようやく本来の姿に軌道修正されてきた。学習障害児にとって、現システムの適用がよいかどうかはこれからのあり方したい。	加配教頭が増えればさまざまな場面でTT方式が可能になる。TT方式のさらなる創意工夫・実践が必要